
タイトル考えてないの投稿時に気付きました

ホイ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル考えてないの投稿時に気付きました

【著者名】

N43333N

【作者名】

ホイ

【あらすじ】

転生オリ主君 + オリ設定ありでの話です。

勤務時間の空き時間等で書いていますので、一話一話が短く不定期になると思います。

被りの無いように考えていますが、有りましたらごめんなさい。

一 個目一

「ねえ、異世界に転生ってしてみたくない？」

知らない女に声をかけられた。

「えっと…宗教なら聞に合つてますが？」

「違う違う！新しく楽しい素敵世界に行つてみたくない？」

ああーなるほど！

「病院から勝手に抜け出したらダメじゃないですかー」

「そっちの人じゃないわよ！失礼な人ね！」

「おばあちゃん！」飯はさつき食べたでしょ？

あつ、フルフルしだした。

これはヤバイ！と本能が轟き叫ぶ。

だが、しかしーここで俺は追撃を——「冗談です」「めんなさい」——行ははずもなく頭を下げる。

女性はため息を一つ吐くと話を続けた。

「どうあれ、一回死んで、転生なぞ…

その一言と共に俺の意識はブラックアウトしていく。

「う…う…」そのまま口を開じてしまえば本当に終わってしまうのか…！

「俺には…俺はまだやるべき事が…！」

「くえ…これに耐えるなんてやるわね。で?やりたいこといつ?」

え?

えーっと、なんだろ?!

勢いで言ひやがつたから特になんもないよ?
んーつとー…あつ、気持ちよくなつてきた!
つて、違う違う。理由。そう理由だ!
これでいいや。

「これ読み終わってな…（スペアアンカー）」

頭が…痛い…です。

だんだんと田蓋が落ちていき、俺の意識は閉ざされた。

「筈なんだけど？」

不思議体験アンビリーバボーだと思つてたけど違うのか？

目を開けたら、街中から暗闇つてのは充分アンビリーバボーだよね。

「さて、とりあえず来てもうつた訳だけど、何か聞きたいことがある

？」

さつきの人だー。

手にはハリセンを装備済みな訳ですね。

「じめんなさいお金これしか持ち合わせが無く…（スパアアンツー）

」

「とりあえず、君に転生してもうつかわった？」

「わかりましたー」

「聞き分けがいいわね。」「わかりましたー」…願い事叶えて「わかれましたー」…あげるわ。何がいいかしら?「わかりましたー」あつ、もちろん元居た場所には「わかりましたー」…帰せないわよ?「..

スパパパアアンッ!!

「それじゃあ、私が口やかましいみたいじゃない!?」

「「」めんなさい」

「で?何がいいかしり?」

この本の続きを!..!

なんて言つちやつたら叩かれるのは田に見えてるので言こません。
あれ痛いんですよ?

んー、とりあえずはこれかなあ?

「両親に俺に変わる幸せな何かをあげてください。」

「え?えーっとそれ位はいいわよ?」

あれ?驚いてる?

転生するって事は死んだって事でしょ?

「つづ、次は？」

えー別にいいよ。なんて思つても口に出せぬはずもなく、何か無い
かと探してみる。

「Iの姿のままはダメですか？」

「それは出来ないわ。両親がフランス人なのに、見た目日本人なん
て可笑しいでしょう?」

「ですよねー。なら記憶消してください。そつすれば未練なんて無
くなるでしょ?」

「本当にそれでいいの?後悔は無いわね?で、次は?」

勘弁してください。もう良りませんから!
願い事の押し売りされるなんて初めてです。

さつきの雑誌をパラパラーと開いていきますかねー。

ぶつちやけあんまり漫画とか読みませんので何でもいいや。

「これください」

指差した先にスーツを着たダンディなおっさんが描かれているんで
す。

漫画だから変な特殊能力とか持つてるでしょ。

「そつちの趣味！？」

「おっさんはいつもません。」の人と同じ力ください。

「何でネギまのタカミチー？普通そこは『王の財宝』とか『無限の剣製』とか主人公級の力じやないの！？」

これネギまって言つんだね。初めて知った。
それと王の財宝とか無限の剣製て何？
なにそれこわい

「田指せダンディなおっさん？みたいな？」

「…はあ、もういいわ。もう行つてきなさい。説明してもどんな世界か分からぬでしょ？」

呆れられましたねー。平和なら何でもいいや。

「はーい。」

「それじゃあ、いつてらっしゃい」

「その前にお腹空きました」

「知るかあーおつせと行けえ！…」

おっと、またかの落とし穴。

いついつ時ねやねつけられないかな？

「H - 11 be back!」

「帰つてくれな！」

・・・・・

はあ、やつと行つたか。

何あいつ？めつちやめんどくねこんだけど？

つてーあこつのは記憶消したいの事もされるじやないー！？

しまつたなー…。

なんかこのままだとムカつくから、これをいつして…いつせてもー

よしー頑張った私！

…次何しようかなあ？暇だなあ…。

一 個目一（前書き）

更新が早い場合は、「ああ、会社暇なんだな…」程度に考えてください。

一回目ー

この世に命を宿し社会の歯車の一部となつて、時既に四年田。
と言いつつも、もうすぐ五年田になりそ�です。

あの時のハリセンのあなたへ。

本当に記憶は消して欲しかつたです…！

思い返す事、産まれたとき。

新たな生を受けた実感などなく、ただ田が見えず、体思ひよつて動かず、声をあげれば泣き声。

泣けば口を塞がれ得たいの知れない謎の液体を体内へと流し込まれるか、公然の面々での羞恥プレイ…『だつふんだ祭』。そして謎のジョリジョリ。

あの出来事はやはり宗教だつたのだと。願い事はうまく勧誘するための口から出任せ。我ながらうまく騙されたもんだと思つ。そして今は黒ミサ等の儀式の途中なのだらつ。俺の運命はいかに…？

タコに！？いくらいに！？

等と思つていた時期もありました。

いや、まあ普通に考えたら解ることなんですけどね。
産まれ、筋肉が未発達なので活動ができず、泣けばトイレかお腹すいたのどちらかですからね。
もちろんジョリジョリは父親です。

それがわかればもう大変ですよ。

考へてもください。今は生まれたての赤ん坊だとしても、元々はいい年した男だったわけなんですよ？

まさに黒歴史ですね。

やり直しを要求する！

まあ、それとは別にあまりにも手の掛からない子供だったでしょう。

子供らしい駄々はあまり捏ねませんし、好き嫌いも無く食べるしで、子供らしさは欠けていたんではないかと思います。

ただ、イタズラをする時は力一杯イタズラしましたよ？隣の家の一夏君を巻き込んでですけどね。

そんなこんなで、明日には誕生日なんですが、リリーダマカのサプライズ。

なんとあのバリゼンの人から手紙がきたんですよ！ホケットの中に。

なぜ今ごろになつて…とか何でポケットやねん…とか色々思います
が、そんなものは1km程向こうに投げ飛ばして、手紙を開いてみ
ます。

* · + > · - < * ^ + - < · , = " ' () -

うん。わからぬ!

『 * 、 、 - 、 - 、 、 " 、 - 、) 、 " + = " =) * * 、 - 、) = ^ + ... れまみ
る。』

くつ…くわう！

あんな恥ずかしい思いをしたのはあの人の策略だったか！？

『 ネウトニー』

くうつ…やつてくれるーあんなにおちゅくつたのがき氣に入らなか
つたのですか！？

『 気に入るかあー』

で、何ですか？

『 会話出来るのはスルーなのね？』

モチの口音で。

『 … くわつ一本題を伝えるわ。君の五歳の誕生日が来たら記憶が消
えるわ。』

そりですか。

『 記憶が消えた後、君の年齢に応じて、君にあげた力を使える様に
しておくれ。』

そんなものがあつたの忘れてました。

一応教えてもらひつても？

『ポケットに手を入れて居合いで要領で握りこぶしを出して拳圧を飛ばす居合い拳。』

：はい？

『魔力は有るけど全く使えない体质で魔法は使えないわ。その代わり気を巧く扱えるわ。』

：阿呆？

『魔法。んで、魔力と気の一いつを合成して使える究極技法である感化法。』

なにそれこわい。

『どれも体を鍛えてないと効果が薄いから頑張って体を鍛えなさい？』

はーい。

『それじゃあ、死んだらまた会いましょ？またね。』

またねー。

との事です。

さてさて、これで俺の人生も終わりなんだと思つと、後悔もやり残した事もあつたんぢやないかと思います。

後、半日もすれば本当に死んだことになりますからね。

最後の最後を楽しみつつ生きたいですね。

・・・・・

と言つ訳で、もう夜の九時です。

ぶつちやけ眠いです。

なんと言つたつて、外側は5歳児ですからね。

こんな子供をこれ以上起こしとく訳にもいきませんね。

明日からは俺の体ではないのですから。

未来ある子供のために！

なーんて、うん。眠くてテンションがヤバイですね。

新しいこの子の未来にNICHIRINよ！

おやすみなさい。

・・・

・・・

この日の夜一人の子供が高熱と激痛を訴え病院に搬送された。

病名は不明とされ、高熱に苦しみ痛みに悶えまた暴れる。

病院に搬送されたその日の日付が変わるまで、悲鳴と叫び声があげ続けられていた。

日付が変われば今までの症状が嘘の様に引き、半月ほど子供は目覚めること無く、まるで死んだかの様に眠り続けていた。

二回目ー（前書き）

いや、本当にタイトルはどうじょうひ？

今日七歳になりました。

この一年間の事を振り替えてみましょうか。

五歳の誕生日の日に高熱を出したらいじのですが、それ以前の記憶が全く覚えていません。

馬的に言つと記憶に覚えていません。

ただ僕が覚えているのは、自分の名前だけで両親の名前すら知りませんでした。

親不孝者ですね。

ずっと友達だった隣の家の一夏君の事も忘れてましたし、千冬お姉さんの事も忘れてました。

無いなら作れば良いじゃない精神で、後は野となれ山となれ。

軽快なフットワークと、素敵なアクティビティ溢れる一夏君と、僕にとつての初恋の人！だけど彼女は一夏にゾッコンー篠ノ之さん家の篠ちゃんど、三人でよく遊んでました。

後、千冬お姉さんの友達で、篠ちゃんのお姉さんの東ちゃん（ソニー呼んで欲しいらしいです）にも可愛がってもらつてます。

いやー東ちゃんと仲良くなるまで長かったよー。

篠ちゃんの可愛さを語り合つことであそこまで発展するとは…。

あえて言つながらば、あの右が決まっていたら僕はここに立つていなかつたでしょうね。

それ以外に覚えている事は、居合い拳とか言つなんか不思議な必殺技が使えるって事と、体を鍛えろってくらいでした。

この体を鍛えろってのがまた曲者なんですよ。

僕は、普通の人より少しだけ筋肉の付きが悪いみたいでして、普段から難航しています。

ですので、篠ちゃんの家は剣道場も経営なされているのですが、そこに僕と一緒に夏君は通っています。

一夏君は才能あるらしいのですが、僕には、剣の才能は全く無いらしいのです。

ですので、行つてもいつも基礎体力の底上げと言いますが、千冬お姉さんと共にランニングや柔軟体操を行っています。

また、普段は何か「そごそ」としている束ちゃんが居る時は、筋トレのメニューとかも教えてくれています。

束ちゃんて普段はあれなんですけど、実は本当の天才なんですね。この間は、何か凄い学会か何かに、論文と発明品を発表したらしいけど、まともに受け取つてもらえなかつた！つて、怒つてましたね。僕の誕生日には凄いことするから、テレビ見ててね！つて言つてしまつたね。

まあ、そんなこんなで未来の細マッチョ計画は難航しつつも皆様の助言のもと日々頑張つております。

…はてさて、ここまで考えてると、僕は一体何者なんでしょうかねえ？

まあ、普通の七歳児ではないのでしょうかね。

漫画的展開で、知らないおっさんとぶつかつた拍子に、意識が入れ替わつたとか？

それとも過去の高熱事件の時に前世のわ・た・し と混ざりあつたのか？

…まあ、セシリヤ辺はびつてかかるでしょうーきっと分おせい。

そんなことより、今は一夏君と一緒に、東ちゃんに言われた通りにおとなしくテレビを見ています。

・・・・・

『――ニュース速報です！先程、日本を射程圏内に位置する約二千五百のミサイルが日本に向けて発射されました！』

へー…。やつなんだー。

『 もう日本は終わりです…』

「ねえ一夏ー、このミカンおいしーね。」

「何でそんなに落ち着いてんだよー！？」

「え？ だって慌てたって何も出来ないじゃん？だから押し入れから出でおいで？」

さつきまで隣にいたはずなんだけどなあ。

まあ、千冬お姉さんの弟だしね。

何があつても不思議じやない。

「本当に大丈夫なのか？」

「さあ？」

「おねえええちやあああんツ！…」

ふうつ、不安を煽ろつと思つたのこのシスコンぬ…。

『続報です！今日本から飛び出した白い何かがミサイルを破壊しております！頑張れ白い何か！ひやつほう！…』

テレビの中継を見てみると、白いロボットぽいのが、高速で移動し、ミサイルを切り裂いていく。

切り裂かれるミサイルが爆発して、近くのミサイルを巻き込み誘爆を起こす。

それを何度も繰り返し、ミサイルを破壊していく。

て、言うかあれ千冬お姉さんじやね？

切りに行く時に、握り直す癖とか、全体的な雰囲気とか？

僕は、隣でアナウンサーと同じよつて、ひやつほうしている一夏に声をかけた。

「一夏。明日筈に会つたら、無事でよかつたーー！と抱き合つてきな。」

「何で筈に？」

「幼馴染みを心配するの」理由なんて要らなこだろ？」

「やつか。」

頑張れ、筈。僕的サプライズ。

うん。頑張れ。

再度テレビに集中する。

もつすぐ終わりかな。

何て言うか凄いね。これ。

もし、あれが千冬の姉さんだとしたら、あれを作ったのは束ちゃん？

「ブウウラアボオウウウーー！」

もしかして誕生日にテレビ見とけつてこれの事？

…もしかしてハッキングして、ミサイル撃つたのも束ちゃん？
いやいやーー！さすがにそれはないでしょ！うーうん！無い無い！

「いいいittやあつほおうつーーー！」

ホントに無いよね？

まあ今は、そんな事よりも…

。

「――夏休みにやること。

――夏のびっくりやかしなことね。

フォーヴー！（前書き）

グダグダが加速する……！

フォーリー！

あれから数日が経ちました。

世界はまたぐるしく動いています。

あのロミサイルを全て撃墜したのは、『IDS』と呼ばれる、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーシラシーです。製作者はやはり束ちゃんらしくて、その後、「どんなもんだい！」と言つていました。

しかし、ミサイルを発射させたのも束ちゃんなので、今はまだ未成年で逮捕はされていませんが、かなり特殊な環境下にあるみたいですね。

このままで行けば、束ちゃんだけではなく、篠ノ家の皆様にも、何かしらのアクションがありそうですね。現に、最近の篠ちゃんは、学校でも苛められたりしますし、家の方にも何度も立ち入り捜査されたりなどしています。

そして今、世界がIDSに注目しています。

例えば、「第三次世界大戦を起こす為の秘密兵器だ！」とか「篠ノ之束は我が国の技術を盗んだ二ダ！」とか「ロマンが足りない！」等と反応はバラバラですが、このままでは本当に日本が、全世界から攻められるのではないでしょうか。

そこで日本政府の打ち出した方針が、IDSの技術を世界に公表、そしてIDS国際委員会の発足への申請。

等と言つてますが、裏ではどんな取引がなされたのかは知りません。本当に世界はまたぐるしく動いています。

ところで、僕のマイエンジニアリングはなんですが、先程申した通

り、学校で苛めにあつてます。

まあ、僕や一夏が側に居る時は大丈夫なのですが、やはり側から離れた時などは危ないですね。

一応、一夏に側に居てあげてとは言つてますが、一夏にも都合がありますし、防げないのもまた事実です。

本日のメニューは、朝から上靴が無い、机の中にゴミと続き、そして授業前の今、篠ちゃんに向けて、黒板消しが投げつけですね。
… そろそろ、一度大暴れしても構いませんよね？

一夏の米神もピクピクしてますね。

「お前等いい加減にしゃがれえええツツツー！」

つて、既に殴りかかつてましたね。

ならば、僕も怒つても良いですよね？

側にあるこの椅子を持ち上げて、ただ投げつける。

椅子は窓を突き破り、中々良い音を響かせながら、消えていった。クラスの中が静まり返るなか、僕の両腕に新しく椅子をリロード。

「今、筈に黒板消し投げた奴は誰だ。… 前だ。前に出る。」

両腕にある椅子が、再度宙に待つた後、教室に突入してきた教師陣に取り押さえられた。

それからは、親呼び出され、長々と説教されたりしたが、後悔はありません。

「窓と窓枠壊してごめんなさい。次からは直接ぶつけるんで。」と、

言つておきました。

教師は顔を真っ赤にして怒鳴っていましたが、僕には聞きません。苛めに気付いていながら、見て見ぬふりしていますからね。

それについて尋ねても、知らないと言つていましたが、最終的には束ちゃんがどうのこうのと叫んでいました。

確かに、束ちゃんのとった手段は

良くなかったと思います。

そこまで急がずに、もっとじっくりといけば良かったのではないか？とも思います。

しかし、それとこれは話が別です。

例え姉が人を殺そと、親がテロリストだらうと、本人には全くもつて関係ないのです。

同一視してしまるのは、仕方ないことだと思います。

ですが、大人が、ましてや教師と言う立場の人間が、生徒に対して行つて良いことだとは僕には思えません。

このままだと、第一の僕や第三の僕が出てくることでしょう。

何て言うか、I - I I b e b a c k ? 違う氣しかしませんがこんな感じです。

…これ。以前にもやつたような気がしますね。

そんなこんなで解放されたので、よしとします。

父にはやるならもう少し穩便に、言い逃れのできない状況を作り上げて、徹底的に追い詰めろ！と言われました。

母には特に何も言われませんでしたが、修繕費を見て真っ青になつてました。

横から覗いて見ると、僕も顔が真っ青になつたのは仕方ないことだと思います。

ごめんね、ママン…。

怒らずに受け止めてくれてありがとうございました。

五個目一（前書き）

感染性胃腸炎……！

今年も来やがつたか……！

五個目ー

あれから、時が過ぎもつすぐ五年生が始まり申す。

あれから、歯が拙者を避けてたでござる。

まさに触らぬ神に祟りなしでござります。

一夏とマイエンジールしか話をくれませぬ。且も会わせてくれませぬ。

まあ、原因は僕にあるのですから仕方ないと諦めています。

毎年、知らない子や嘘だと思っている子が居るのですから『篠ノ之

束の妹だから』で嫌がらせをする子が居るのですよ。

以前みたいに壊したりはしないですよ? もうモヤシといひ飯は嫌なの

で。

一夏はそこまで嫌がられはしていません。
嫌でも僕のが印象に残るのでしょうか。

それどころか、最近ではかなりのモゲ期…モテ期に差し掛かつたみたいでして、フラグを建築してるみたいですね。

マイエンジールも気が気じゃないみたいで、モキモキしてるのが手に取るようにわかります。勘弁してください。

一夏はイケメンですからね。優しいですし。朴念神ですが。

「いってえーなんだー!?

「一夏どうした?」

「いや…頭を殴られた氣がするんだけど?」

「気のせいじゃない？ 何もないし。」

「だよなー。なんだつたんだ？」

居合い拳炸裂！

たまには良いよね。こんな事しても。
ほほほのほつと。

そんなこんなで今は春休みです。

実は今日でマイエンジエルは引っ越しする事になっています。
誰にも言わずですが。

春休みの間に引っ越ししてビックリ！
てなもんですよ。

ですので今は三人で校舎を見回っています。

後で僕は消えますがね。後は一人でお楽しみくださいって感じです。
勿論、僕もマイエンジエルの側に居たいですよ。
最後くらい一人だけにしてあげたいじゃないですか。

「第一そこはもう良いかー？」

「ん、そうだね、次いこつ。」

「ちょっとトイレ行ってくるから、一人で行つておいで。後で探し
て合流するか、ひつ。」

「おひつー。」

幕の前を通りすぎた時に、頑張って言つておきました。

「なつ！」

狼狽えている、狼狽えている。

ホント頑張れ！相手はいろんな意味で強敵だ！

さて、二人から別れたのですが、これからどうしましょうか。
とりあえず、用を足したのですがやることがあります。
ダンボールでもあれば、一人の様子を探りに行くのですが、無い物
ねだりはしくありません。

二人に見つからないようにブラブラしますかね。

・ ・ ・ ・

うーむ。ホントに暇ですね。

なんたつて毎日見ている光景ですからね。

なんの楽しみもありません。

角を曲がると、女の子が居ました。

春休みなのに珍しいですね。

あれってツインテール？って言つんですか？可愛らしい女の子ですが。
マイエンジンには劣りますが。

面倒事が降つてきやうな気がするのでコターンです。

「あつーちよつとあんたー何で帰つて行つちよのよー?」

「あつ…めんどくさい。」
「いえ、忘れ物を…。

「めんどくさいーー?」

「何故本音を!?

「今、口こしてたじやない!?

「わざとです。で、何ですか?」

中々ノリの良い子ですね。

一夏に通ずる何かがあります。

「ぐぬぬーーふうつーー職員室めんどくさいーー?」

「職員室ですか?それならそちらの階段を登つていただいて、登つて右側にある渡り廊下を渡つてください。で、その正面に階段がござりますので、一番下まで降りていただいて、その前の渡り廊下を渡つてください。そのまま左に曲がると階段がございますので登つて下さうすれば職員室が前にありますので。」

僕頑張った！何度も噛みそつになつたことか。

「と、う、遠いわね…。ありがとう、探してみるわ。」

「頑張つて下さいな。それでは。」

「あつ！あんた名前は！？」

「小田切丈です。」

「私は、凰 鈴音！ありがとう…」

「いえいえ。それでは。」

さて、あの子はいつ気付くだらうか…。
職員室はそこにあって、さつきのルート通つてもたどり着く場所は
ここなんですよ。

ただ、やつてしまつたなあ。と、後悔しています。

彼女と僕は初対面ですからね。

いくら一夏と同じ様な人だとしても、嘘の名前を教えて、遠回りを
教えたのはやりすぎだと思います。

「さて！頑張つて行くかな！」

「――――あの――凰さん！」

「くつ～あなたがいの…」「申し訳ありますわん。嘘つきました。」
「へつ～」

僕は凰さんの後ろを指差し、「職員室はあります。申し訳ありません。」と、頭を下げた。

「えーっと、やつを教えたのは嘘で私を迷わせようとしたってこと?
?」

「それは違いますーわやんといにたどり着けますー。」

「じゃあ、何でまたそんなことを?」

「わかりません…ただ、」「う…幼馴染みと会話しているような、長い間友達だったような気がしてしまいました。」「めんなさい。」

「ふうーん…辿り着けるんだ…。なら一緒にに行へわよ?お詫びをかねて案内してよねー。」

「おお…ーーの子優しいーー。
許してくれるとは…。」

「泣いてぐだぐだにな。ひゃんヒスパークさせていただきます。匏持りますよー。」

そう言いながら、僕は彼女から鞄を受け取り連れだって歩きだしました。

一人で歩くと長い距離ですが、一人で喋りながらだと短い距離なのです。

家族の事や友達の話、前の学校はこうだったー！とかこの学校はこうだよー！とか敬語やめない？とか一杯話しました。

そして彼女と僕は同じ年らしく、次の学年からの転入せいらしいのです。

本当の名前もちゃんと伝えましたよ？

飛び蹴りされましたが。

違うクラスになっても仲良くしてこうと約束して、職員室の前で別れることになりました。

新学期が楽しみですねー…。

⋮⋮⋮

エンジエルウウウウツツツ！

新学期からエンジエルいない！

マイエンジエル算いない！

楽しみじゃねえ！！

バカヤロオオオオ！！！

五個目一（後書き）

(、 、 、) > ポンポン痛い

六個目ー（前書き）

グダグダグーダグーダー！
ぱねえよー。

クリスマスネタ思い付いたので今から書いてきます。

六個目ー

取り乱しました。

今日の出来事。

僕の女神...s 篇が引っ越しするので、最後の学校見学。

一夏と二人っきりになれるように僕はレムオルを唱えました。詠唱
は『トイレ行ってくる。』

校内ブラブラとまよひ歩いて。

職員室の前で女の子を騙す。

彼女を校内を案内。

「新学期が楽しみです！」

新学期から僕の女神様いない！○○○ 今ここの

つて事です。

居ないですが、新しい住所になつたら手紙をくれるそのので、待つてます。

その時は三日に一回手紙を書きましょう。

呪われてそうですが大丈夫でしょう。
愛ゆえに重たくなるものです。

さてさて、ホントに一人を探さないとダメですね。
女神が熱暴走してないと良いのですが…。

・・・・・

いませんねー。

二人でお楽しみを……！？

あるわけ無いですね。

まず一夏にはそんな機能搭載されていませんね。

因みに僕の名前は鏡凛かがみりんです。

味醂じやないですよ？

小田切丈は嘘です。

蹴られたから嘘は言いませんよ。

誕生日はもうすぐです。

誕生日が来れば学校が始まります。

…本当に居ませんね。

冗談抜きで飽きてきたんですけど。

「…夏、もし大人になつて、もう一度会えたら…」

「ん？」

おれかにのタレハグせ…。

「毎日私の作つたお味噌汁飲んでくれる？」

「おうつ！ 良いぜ！ 美味しいの頼むな！」

女神がイツタアアアア！！

今まで俺の残機が確実にピュツた！二つの意味でピュツた！

「うん！一杯練習しつく！」

「任せたぜ！」

そつか。

良かつたねマイエンジエル。

なんか篠の恋が実った事で安心したのか、悔しいのか田の前が震んできましたね。

あー。ヤバイですね。

二人を見ていたりません。

駆け抜けます。

今日は何も考えたくない。
何も聞きたくない。

感じたくない。

すべてを振り切る様に走り抜け、気がつけば僕はベッドの中にいました。

あれから一時間程しか経っていませんが、かなり冷静になれたと思います。

正直言つてしまえば、僕だって筈に期待したりもしていたんですよ？『今は一夏に向いてるけど、いつかは僕に…』みたいな幻想を抱いたりもしていました。

ですが、やはり筈の悲しむ顔など見たくありませんし、望むなら叶えてあげたいじゃないですか。

そう思つて割り切れたつもりだったのですが…所詮は『つもり』だつたみたいですね。

ピンポーン

インター ホンがなりました。

親は居ないみたいですね。

仕方ないですなー。『僕子供だからわかんない!』やつてきますか。

「はい。」

『あつ！凜？俺俺！俺だよ俺！』

「振り込め詐欺なら間に合ひてますが。」

「夏エ…乗つてもうたやないか……。」

『違ひツ！？何で先に帰るんだよーー！』

「あれから一人を探していたけど見つかってない。しかも気分悪くなってきたから…『めんな？』」

『それなら仕方ないなー。大丈夫か？』

「大丈夫大丈夫。少し寝れば治るぞ。」

一夏、悪いね。

嘔は吐いてないよ。多分きっとおそれく。

「簞もいる？」

『何？』

「最後なのに」「めんな？一緒に居たかったんだけど…」

『気にしないで？絶対にまた皆で遊ぼう？』

「そうだね。また皆で一緒に。」

『んじゅ、そろそろ行くなー。ちゃんと寝とけよ。』

『ちやんと寝ててね。…ありがとう。』

「あーい。またねー。」

「ものの見事に。」

僕は何をしてるんだか…。

素直に笑顔でいれば良いじゃないか。
はあ…寝よう。

そして田を覚ませば晩御飯の時間。
母は寝ている僕を起こしてくれました。
寝ている間に泣いていたのでしょうか、涙の後があり、少し心配されました。

「大丈夫。何でもないよ。」

そう答える僕の気持ちもきっと気付いてるのでしょうか。
母は特に何も言わいでくれました。

そして、晩御飯はあまり喉に通りません。
好きなおかずなのですが、今日は駄目みたいですね。

「なんだ? フラれたか?」

いきなり何を言つてるんだ、このクソ親父は。

ウケケケケ！と笑いだした父に、居合い拳を叩き込みたくなる気持ちはわかつてくれますか？

母もニヤニヤしながら此方を見ないで下さい。

「まあ…なんだ？フラれる気持ちはよくわかる！だけどな…そこでもお前は逃げんのか？」

「逃げる…？」

「そうだ。今まで下らない理屈振り回して逃げて来たんだ。男なら逃げずに砕けてこいや。たとえ届かなくとも心には残んだろうよ。」

「あら？お父さんが三つと説得力あるわね？」

「かつ…母さん…！」

「凛？お父さんてね、片思いでずっと好きだった子が居たのよ？ホントのホントにアタックし続けてフラれたのよ？重みあるわねー。」

「ダメじゃん。」

「もうでもないのよー？あの時なんてね…「もうやめてくれ…」
「…」「オホホホホ！」

うん、何かこの一人見てたら馬鹿になってしまった。
自然と笑いが込み上げてきます。

そつか、当たつて砕けるか。

うんー。碎けるしか無いでしょー。

明日の朝、篠が行く前に会いに行ひ。そして伝えるんだ。ずっと好きだったって。

その日の晩は昼寝をいつぱいしたのにゆっくりと眠る事が出来た。そう、ゆっくりと眠る事が出来たのだ。

・ · · · ·

取り敢えず言います。

寝坊しました！

篠の家の車が今走り出しました！

当たつて碎けることすら許されないのでしょーかー？

クソッ！—気付け気付け気付け気付け…！—

……行っちゃった。

あーあ。ものすごい残尿感がある感じです。

どうしよう。

ホントに泣けてきた。

「凜？」

昨日帰らずに最後まで居れば良かったですね…。

「おーい？ 凜ー？」

後悔先に立たずですねー。

「だーれだ？」

おおうっ！ いきなり田の前が真っ暗に…？
とか、言いますが、今の声は…でも今行ってしまったばかりですし
…。

「凛？」

「めがつ…！ …幕？」

「何してるので…？」

後ろを振り向くと、やせまい女神でした。

あれ？ セツナの車…。

「今ね、お父さんがガソリンスタンド行ってるんだー。」

「セツナ。」「

ヤバいやばいやばいやばい……言葉がでない！なにこれヤバい！
言葉を口にしようとするが、言葉にならない声が出でます。
落ち着け落ち着け落ち着け餅突け！餅食いてー。
違つーホントおちつけ！

「これでお別れなんだね。やつぱり寂しいな。」

お別れ。

そうだ。

今日は砕けに来たんだ。

「ねえ、簾？知ってる？」

「何？」

「僕、ずーっと簾のこと好きだったんだよ。うん、初恋だね。」

「え？ええええー？」

簾がまさに驚愕！って顔しています。

そんな顔もまたプリティー。

「勿論、簾が一夏の事好きなこと位知つてたよ？ずっと好きで見てきたんだから。」

「えうつー？えうつー？」

篠の顔がマジ真っ赤っか。

照れてるのかな？

そんな僕も顔赤いだろ？

「まつ、知つておいてほしかったんだよ。鏡凜は篠ノ之篠が好きだつて事。」

「あうあうあう…。」

何この子マジ天使。
お持ち帰りしたい！

「さて！伝えたい事は伝えたし、最後に一言…味噌汁頑張れ。」

「なつ！？なんでそれを知つて…まさか！」

「んじや、篠またね！…つか笛で絶対に会おつ！…何年かかっても絶対に！」

「えつ、あつ、うん！」

僕はその言葉を残して家路へと急いだ。
当て逃げの要領で急いで帰りました。
心音が鳴り止まない。
ずっとドキドキしてる。

取り敢えず恥ずかしかつたよ！
でも、すつきりしました。

また、いつの日か出会えることを信じて、これからも頑張っていきます！

出会えなかつたら犯罪でも起こすかなあ…。
新聞の一面に乗るくらいの…。
動機は好きな子に会いたいから！うははー！
笑えねー…。

メーリークルシミマス（前書き）

ガンダム見てたらこんな時間になっちゃって、投稿するの忘れてました。

メリークリスマス

今日はクリスマスーと言つわけでして、お母さん監修でケーキを作つています。

とは言つもの、僕たちのする事などはイチゴ切つたり、イチゴ乗せたりするだけの簡単なお仕事です。

この後なんですが、マイエングルとクリスマスパーティーをする予定です。

「ねえ、一夏ー。」

「なにー？」

「幕にクリスマスプレゼント用意したかー？」

「したぞー。」

「おおっ、珍しい。」

「いつも凛に怒られるからなー。」

そうなのです。

一夏つて、毎年の事なのに用意しないんですね。

安くても良いから用意しろー!と言つのですが、今年は用意してきたみたいですね。

今年こそは「お前は俺のおかんか!?」と言われなくてすみそ�で

す。

「で、何にしたのや?」

「へへへーこれだー。」

こんな置物。

「…誰…」

「第1回。」

「ンンン！

ふうつ。思いつきつて殴ついたが

「何すんだよー。」

「誰がこんなもん貰つて喜ぶんだよー。」

「俺は嬉しいー。」

「やひばつアホのー夏だー。」

来年からほいれ

を送り続けてやるー。

「みんなもん貰つて喜ぶ女の子これほんぱなこでしょ！」

「千冬姉は喜んでくれた！」

「ちー姉ええええー！…？」

「これの何が嬉しかったんですか！？
一夏め！そんな勝ち誇った顔するんじゃない！
千冬さんは一夏から貰つたから喜んでるだけだ！」

「ええい！…とりあえず起下だ！」

「なにゆえー？」「

「これ渡しどか…。」

「ヒド取つ出しひの一夏絆由のマイモンジールへのプレゼント。
おかんの証つりです。」

「むうつ。わかつたよ…。」

「中身はリボンな。白い生地に赤のワインが入つたの。」

「あーあー…。ホントに凛は俺のおかんか…？」

「今年もか…。」

そして、クリスマスパーティーのプレゼント交換の時、マイエンジエルが、女神のような笑顔を振り撒いてくれました。

因みに僕からは、手作りクッキーです。

マイエンジエルからは、手袋とマフラーを貰いました。
一夏からはエプロンでした。
蹴りました。

メリークリスマス（後書き）

僕は今年は子供にライダーベルトをあげました。
因みに六歳の子です。

おしゃーがつー。(前書き)

あけましておめでとうございます。
くれましてさようなら。
思い立つたので書きました。
会話だけで成り立つています。

おじょーがつー。

「ねえ、一夏。」

「ん?」

「何か正用いらしこ」としなー?..」

「んー?今してるだろ?」

「炬燵に入つてミカン食べながらテレビを見るのは飽きた。」

「んじや、なにあるよ?」

「初詣?」

「しゅわしうわのひ、ひよつ...」

「無茶は止めときなよ脳筋。」

「いぬかー、もやー。」

「正用いらへ羽子板でもするへ。」

「装備がないただの屍のよつだ。」

「福笑い?」

「鏡見とかよ。」

「超絶ブーメラン。」

「鈴呼^ギぶ？」

「蹴^キられるから止めとく。」

「おひな^{ハニカミ}なきゃよくね？」

「無理じゃね？」

「鈴可哀想だな……。」

「一夏と同じ脳筋だから？」

「お前後で体育館裏な？」

「ほい、新しいお茶。」

「サンキュー。」

「…。」

「どうした？」

「この人痩せたねー。」

「最近見なかつたしな。」

「癌か？」

「おぐ嚙こするなよ。」

「チャンネル変えるよ。」

「おーい。」

「エウかー…。」

「憧れるよなー。」

「男なら特にな。」

「デコルだろ。」

「ロケットパンチにな。」

「…。」

「外へ出る。」

「寒いから嫌だ。」

「…でも、束をそびひこむんだからな?」

「また変なもん作つてんじゃね?」

「歩く血脉とか?」

「空飛ぶベビーデシ。」

「移動式トイレに1ペリカ」

「ミサイル型人参に1000厘。」

「透ける眼鏡もありそうだな。」

「簫探知機とか?」

「簫どうしてんだろうなー?」

「手紙来ないな。」

「元氣してんのかな?」

「泣かしたやつは死刑」

「殺しはいかんだろう。」

「それこそ遺憾砲を発射。」

「ホントに簫好きな?」

「まーね。」

「束さんと語り合つだけの事はあるわ。」

「餅焼けたよ、食つ?」

「食つ。」

「醤油？砂糖？あん」^{（アソニム）}

「醤油。」

「ほい。」

「サンキュー。」

「熱いから火傷しないでよ。」

「マコネーズ止めね？」

「なんで？」

「キモい。」

「お前は全僕を怒らせた、外へ出る。」

「寒いから嫌だ。」

「マコネーズの良さを枕元で語り続けてくれよ。」

「簞とマコネーズ」

「もうひ簞」

「あつ、千冬姉だ。」

「「」の前のだね。」

「やつぱすばえなー。」

「だなー。ほい、茶のおかわり。」

「サンキュー。」

「なに！？なんの！？あの子達のジジババ夫婦の正月は！？」

「こつからあんな老けてしまつたのだ！？」

「篠ちやんや鈴ちやんが居ないだけであれども老け込むの！？」

「誰かーあの子達に救いをーー。」

おじょーがつー。(後書き)

新年のつけかり句をしつらんでしようか?

六回目 - (前書き)

モンハン3G買つたら、DIVA工クステンでやる時間無くなりました。
グダグダじゃありません！
マッタリ進行です。

中学生になりました。

今は中学校一年生の夏休み前なのです。

僕の女神と別れてから既に一年になりました。

犯罪はまだしてません。

そんな僕も気が付けはなんか、『氣』を使えるようになりました。

なにこれマジ怖いんですけど。

この気を使って色々できるようになりました。

高速移動とか、三角飛びとか、かめはめ波とか使えます。
いやいや。日常生活にいらんでしょう。ホントに僕って何者なんでしょうか？

もしかして人じゃないとか？

漏れそうなんですけど。

前に学校で遭遇したポケモ…転校生の鳳 鈴音ですが、五年生
から一緒にクラスでして、

一夏と三人でよく遊んでいます。

鳳さんのご実家は、中華料理店でして、かなり本格的な中華料理を
かなりお安く頂けます。

一夏が、鳳さんのお父さんに気に入られたらしく、よくお昼や晩御
飯をじちそつになりながら、鈴音を嫁にしろと言われてました。

逆に、僕はお母さんの方から気に入られたらしく、鈴音の婿に来な
いかと言われます。

そして、口論へ…。

その後に顔を真っ赤にしながら飛びかかる凰さんが印象的です。

そんな仲良し家族ですが、最近家中でも口論が絶えないらしいです。

何でも、「伝説の食材と呼ばれる『あれ』を求めて旅立ちたい！」と力説するお父さんと、「そんな事より現実を見て！」と懇願するお母さんらしいです。

一夏曰く、「おやツちゃん…ロマンがあるじゃないか…」との事です。

僕はロマンよりマロンの方が好きです。

美味しいじゃないですか、ケーキ。

甘党なんですよ。

コーヒー？ そんなもの飲めませんよ。

そんなお父さんに最近不信な動きがあるみたいですね。
何か企んでるらしいのですが、全容は掴めません。

話は変わりますが、そして世界はまた動き出しました。

束ちゃんの作ったISなんですが、実はあれ、女性にしか動かせないようになつていたらしくて、今まで前線で活躍していた男性よりも、女性が優遇されるようになつっています。

ISを作るには束ちゃんが作り出したコアが必要で、全部で467個しか作られていないです。

それを国家で仲良くわけわけして、研究しましちゃう？
てな感じです。

ISは兵器としての利用よりも、『スポーツ』の様にルールを決め、その中で戦いましょう？ ってなもんでして、去年…僕が六年生の時

に第一回モンド・グロッソってのが開催されました。

なんかいっぱいの部門を通じて総合一位を目指しましょーーー的な感じです。

総合一位にはブリュンヒルデとか言つ称号が貰え、各部門の一位にはヴァルキリーなる称号が貰えるらしいです。

そして、第一回モンド・グロッソの総合一位のブリュンヒルデ様には、一夏のお姉さんである千冬お姉さんにでした。

ぶっちゃけなにしてんの…。と思いましたね。

普段から『職業不明であまり家に帰らないのに、しつかり給料は稼いでくる不思議な千冬姉』と一夏が言つておりましたし、僕自身もあまり会えませんでしたしね。

まあ、僕からしたら、千冬お姉さんが最強の女性ですからね。

不思議ではないんですが、世界は不思議に包まれるので、上には上がいるんだろうなーとは思つてましたが、ここまでの人とは予想してませんでした。

そして、先週から第一回モンド・グロッソが始まりまして、千冬お姉さんが今年も出場しております、三日後には決勝戦が始まみたいですね。

いやー凄いですねー。

ここまで来たら、是非とも千冬お姉さんには優勝してもらいたいですねー。

頑張れ！千冬さん！僕はあなたを応援しますっ！！

まあ、それが原因かどうかはわかりませんが、ただいま僕と一夏、大・絶・贊！襲われ中です！襲撃されますー！

なんやねん。

皆さんもそう思つでしょー。

僕も思いますからね。

なんか、数十人の黒いスーツのゴツい外人さんがやいのやいの言いながら走って来ます。

僕にそんな趣味はないんだつ！！

…テンパつてますね…。

とりあえず、落ち着くためにも状況整理を。

学校出る。

鈴音とバイバイする。

車が横に止まる。

「Are you ICHIKA ORIMURA?」
「YES—高須クリニツク！」

「待てゴルアアアア！」
「いやああああつ！」

そして人気の無いところへ…

うん。意味がわからない。

やはり、あの二ダ二ダつるつい半島でしょうか？しかし、あの半島はコアを貰えなかつたみたいですからね。

去年、ブリュンヒルデが決まったと氣には『織斑千冬は我が國から

日本に派遣された人材ニダ!』って言つてましたからね。
誰も相手にしませんでした。
文化ですね。

それとも、一夏を誘拐して、千冬お姉さんを脅迫し、決勝戦で千冬
お姉さんに負けると迫るのでしょうか？

千冬さんが負けて得をする人または国ですか？これは多分無いでし
ょう。僕みたいな人間にでも、想像できる事は行わないでしょう。

…まさか！秘密結社か！？全身黒ずくめですし、危ない雰囲気です
しね。

うん。無いわ。

それなら半島のがありそうですね。

まあ、そんなことより、今は一夏を逃がす方が先決でしょうか？
僕が捕まつたところで千冬さんには心配はしてくれると思いますが、
大きな影響は出ないでしょう。

一夏が捕まれば、千冬さんが『怖い』です。

ブラコンですしね。

うん。

どうにかして、頑張りつ。

「なあ、一夏。それ、入れそつか？」

「はあ…はあ……」れか？一人な、ら大丈、夫そうだけ、ど…？」

「なら入れ。」

「まあつー!?

「バテてる一夏は、ここで先に休憩しあつて事だよ。僕なら大丈夫。上手いこと逃げてみせる。」

「……本当だな？」

「一時間位教科書読んどけ。そしたら脳筋も少しは賢くもなるんだ
わつよ。」

「ちよつ・てのんつ・」

ウケケケケと意地悪そうに笑う。

「んじゃあ、行ってくれ。わ。

「気を付けろよ？」

「あかせとさつじ。」

そう言つて僕は走り出した。

氣と居合い拳を使って逃げる為の道を切り開く為に。

・・・・

あれから三十分経ちました。

僕が進んだあとの道には多分二十人程の人が倒れてる筈です。
結構な人数の顎を打ち抜きましたからね。

脅迫概念に迫られて、練習した甲斐がありました。
ですが、正直に言いましょう。

銃を使うなんて卑怯だ！

僕も拳圧を飛ばして攻撃しますから、あまり人の事は言えません
が、卑怯だ！

サイレンサー着けて撃つとか卑怯だ！

そんなこんなで足を撃ち抜かれて立てません。

そのままマウントポジションでかなり殴られまして、もう何が痛い
のか、何が苦しいのかわかりませんが、とりあえず声にならない声
が出てきます。

とりあえず念じます。

一夏来ないで！と。

「オリムライチカテテコイー コイツヨコロスゾ！」

片言…！

違つ違つ。

「来るわけ無いだろ？がボケ！一夏は逃げたよ！バー ガツー…？」

お腹蹴られました。

何か込み上げる感じがありましたが、ここは我慢です。
この姿を見ても出でこないよう、余裕の振りなんです。

「貴方達退きなさい。」

「ミス・ミコーゼル。」

「後は私がやるわ。貴方達は拘束の用意をしなさい。」

「Y e s ! - I - m a n ! 」

「織斑一夏出てきなさい。今ならこの子の命もちゃんと助けてあげるわ。」

「だから、一夏は既に逃げたって言つてんだろ？」

「ふふつ、あなた達の監視位ちゃんと出来てるわ。織斑一夏の身柄を無傷で確保したかったのだけれど、君は少しやり過ぎたのよ。」

「ツツ…？一夏逃げて…」ひつけに絶対に来ないで…」

頭に何か固いものを押し付けられました。
きっとこれは銃口なのでしょう。

「今から十秒以内に出てこないと、『もう止めてくれえええ！』
あら、速い。」

「一夏のバカ……！」

出てきた一夏の顔は、涙と鼻水で酷く歪んでいます。
僕は一夏のあんな顔を見るのは初めてです。

「ホントに凛を助けてくれるんだろうな！？！」

「ええ。約束は守るわ。…貴方達。」

一夏が拘束されながら、僕に何度も何度も謝りながら涙を流します。

「大丈夫。だからそんな顔しない。」

一夏が連れていかれます。

そんな後ろ姿を見送る僕は悔しくて、情けなくて、涙が溢れだして
きました。

「さて、君の身柄だけ私が連れていくわ。彼とは別の場所よ。」

「僕がここで抵抗したら？」

「抵抗は……してもいいけどしたら彼の身は保証されないわよ？」

「ですよねー。」

僕も一夏と同じように手足を拘束されて、首もとに何か刺されました。

あのチクッとした感じは注射でしょうか？

栄養剤とか痛み止めなら嬉しいのですがそんなわけはありませんよ

ね。
ほーり…臉が重たくなつ……てき……まし…た…。

「ああ。君名前は？」

「おだ……ぎ……り……み……う…?」

「も…もひ…ダメ…ダメ…。」

（後書き）一・四箇目

リイイイイイイイ
ンひんせやあああああん！
ミイイイイイイイクさああああん！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333z/>

タイトル考てないの投稿時に気付きました

2012年1月5日23時47分発行